

5-9	
主題	手拭お絞りを使用した簡易的腹部温罨法による排便促進に関する考察
副題	継続性のある取り組みを行うことで自然排便を！！

キーワード1	排便促進	キーワード2	温罨法	研究期間	2ヶ月
--------	------	--------	-----	------	-----

法人名	社会福祉法人 長岡福祉協会 首都圏事業部				
事業所名	特別養護老人ホーム 新橋さくらの園				
発表者：	桑田 博史、江川 匠 (くわた ひろふみ、えがわ たくみ)	アドバイザー：なし			
共同研究者：	根廻有希、中島愛、吉川康之、佐藤望、坂本幸子、早坂絵理、根岸里沙、瀬田裕 沖田利香、曳地かおり、松尾優				

電話	03-3433-0183	FAX	03-3433-7320
----	--------------	-----	--------------

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	所在地：東京都港区新橋 6-19-2 福祉プラザさくら川 新橋さくらの園 施設概要 『自分や家族、親しい友人が利用したと思うサービスの提供』を法人の基本理念に掲げ、理念の具 現化の一つとして『給食から食卓へ』を掲げています。全室個室の本体施設では介護職による朝食ユニット調 理を実施。サテライト型特養では三食完全ユニット調理を実施し、生活者としての入居者の視点保持と自立支 援を奉仕に掲げています。
------------------------------	---

<p align="center">《1. 研究前の状況と課題》</p> <p>【A 様の課題】 トイレに座られた際に排便ショックのよ うな意識消失が月に 3 回程度みられていた。意 識消失と排便との因果関係は不明であるが日 頃から便秘傾向（未排便 3～4 日）というこ ともあり服薬による排便コントロールを実施 していた。自然な排便を促すことで身体への 負担の軽減を図ることが課題であった。</p> <p>【B 様の課題】 下剤服薬に至らないまでも 3～4 日排便が ないことが度々みられ便秘傾向であったため 便秘の解消をすることを課題とした。 また、排便間隔が A 様と類似していること からも比較対象として B 様を選択した。</p>

<p align="center">《2. 研究の目的ならびに仮説》</p> <p>本研究で行う腹部温罨法は、排便促進効果 が期待され、下剤の服薬を要することなく排 便を促す事ができ、また A 様については、自 然排便を促す事で意識消失が減少するのでは ないかと仮説をたてた。</p> <p align="center">[便秘の定義：出典、日本内科学会]</p> <p>3 日以上排便がない状態、または毎日排便 があっても残便感がある状態のこと</p> <p align="center">《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>① 対象者:A 様(女性) 年齢:99歳 入居期間:4ヶ月 要介護3 食事形態:やわらか食(昼、夕の主食はパン 粥) 平均食事摂取量:7割 対象者 B:様(女性) 年齢:79歳 入居期間:24ヶ月 要介護4 食事形態:常食 平均食事摂取量:10割。</p> <p>② 期間：平成 27 年 5 月 10(日)～平成 27 年 6 月 8 日(水)の 30 日間</p> <p>③ 取り組みの時間・場所：朝食時、食堂</p>

④ 実施頻度：毎日

⑤ 取り組みの工夫

必要な物品を施設内にあるものに限定して実施する事が可能。簡易的に行える方法を考えることにより、再現のしやすさ、継続のしやすさを追求。

⑥ 方法

朝食時に使う、温めたお絞りを10個をレジ袋に入れて閉じ、タオルを巻いて腹部の上に20分程度乗せ腹部の温めを行う。(設置5分後には腹部温度が42度以上となり設置20分後まで42度を保つ。)

⑦ 取り組んだ職員数と構成

13名：ブロック職員

⑧ 必要とした道具

手拭お絞り、レジ袋、ハンドタオル2枚(全て施設備品)

⑨ 活動の成果を出すポイント

レジ袋を閉じて保温効果を持続すること。

《4. 取り組みの結果》

本研究施行前30日間(①)と施行中30日間(②)の排便状況は次のとおりである。

A様

① 排便有8日,下剤8日,意識消失2回

② 排便有7日,下剤8日,意識消失1回

排便促進効果は見られず、下剤による排便コントロールが継続したが意識消失は1回に減少した。

B様

① 排便有11日、下剤1日

3日以上排便無し 3回

② 排便有12日、下剤0日

3日以上排便無し 1回

定期的な排便が見られた。

A様B様共に「温かくて気持ちいい、そのままにしておいて」などの肯定的な発言が聞かれた。

《5. 考察、まとめ》

本研究では、排便促進に関してA様の場合には効果が得られなかったが、意識消失に関しては減少した。一方、B様の場合には便秘傾向が解消し、排便促進効果が得られたのではないかと考えられる。

また、A様B様ともに「温かくて気持ちいい」との肯定的な発言が聞かれ、リラクゼーション効果もあったのではないかと考えられる。さらにA様については食事摂取量が7割から7.8割へと増加した。

以上のような結論が得られたが、明白な結論を導き出すには研究期間や対象人数が不十分であったと思われるため、現在も継続して研究を行っている。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

施設入居の際に外部研究発表の許可を署名・捺印にて頂いている。さらに今回、具体的な取り組み、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことをご本人ならびにご家族に説明し、了解を得たことを以って同意とした。

《7. 参考文献》

「Kao アルファポ-トNo.35」

～著者名：菱沼 典子～

2012年2月29日発行

「排便援助における温罨法の部位の検討：腰背部と腹部における比較」

～著者名：木下 彩子 石井 範子～

秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要
2013年10月31日

《8. 提案と発信》

自然な形での排便促進はどの施設においても課題であると思うが、運動・足浴・マッサージ等さまざまなアプローチがある中で本研究では温罨法を用いた。職員の人員不足がある中で、新しいことや入居者にとって良いことを継続して行うためには、手間をかけずに効果をもたらすような取り組みが必要になってくると考えられる。